



宿泊客と朝食を食べる「まがき」の店主、遠藤仁雄さん（左） 11日、宮城県石巻市、竹花徹朗撮影

未来語らう 妻の夢だった食堂で

北上川沿いの民泊兼食堂「まがき」の朝食に並んだのは、近所で採れたシジミのみそ汁や得意のオムレツだ。一人で切り盛りする店主の遠藤仁雄さん(69)は11日朝、宿泊客の朝食の準備に追われた。

2017年5月、宮城県石巻市大川地区の自宅の2室を宿にした。横には15席ほどの食堂。厨房に立つと、浮かぶのは妻祐子さん(当時54)の顔だ。「代わりに夢をかなえた俺を、うらやましがっているだろうな」あの日、仙台市内で仕事中に激しい揺れに見舞われた。「家

宮城・石巻

の中がめちゃくちゃだけどみんな無事」。自宅の祐子さんからメールが届いた。

翌日、自宅にたどり着いたものの、1階の壁は津波で流され、祐子さんや両親の姿がなかった。

少し下流の大川小学校で84人の児童と教職員が死亡・行方不明になるなど、地区の住民418人が犠牲になった。

大川小近くで遺体の身元を確かめる役目を任されて約3週間後、トレーナーと赤いエプロン姿の遺体が運ばれてきた。すぐに祐子さんだと分かった。その約1週間後、両親が遺体

で見つかった。

3年後に退職し、ユースホステルに泊まりながら、屋久島や小笠原を旅した。震災について話すのはおっくうだったが、話すうちに気持ちが軽くなることに気づいた。

一度失われた故郷に、人が語り合える場所をつくりたいと考えた。祐さんは東京・霞が関の食堂で働いていたときの同僚で、「店を持ちたい」と夢を語っていた。代わりに自分がかねえた。「伝承やまちづくりでやって来る若者を応援する宿でありたい」

(原篤司)